

1. はじめに

●人と鉄との出会い

最初に人類が鉄と出会ったのは、空から降ってきた隕鉄が最初だったという説が有力ですが、詳しいことは分かっていません。隕鉄とは隕石の一部で、鉄にニッケルが混じったものです。

最古の鉄は、前3000～2000年頃のもので、イラン・イラク・トルコなど西アジアを中心に発見されています。鉱石を粉末にして顔料にしたり、玉などの装身具の素材に用いられました。

その後、鉄を人工的につくる技術を生み出したのはヒッタイト帝国(紀元前1900年ごろ～1200年ごろ)であったとされています。紀元前14世紀ごろから武器に使われるようになったことから、このころ人工の鉄が作られたのではないかと考えられています。ヒッタイト帝国が滅んだ後、製鉄、加工技術が広くヨーロッパや東アジアまで徐々に伝わったようです。

●東アジアの古代鉄

アジアでは、鉄文化の発祥の地は中国でした。最古の鉄器は、中国の殷・周代にみられ、河北省台西村の殷中期の墳墓から出土した青銅製の鉞(えつ)の刃部に鉄の使用された鉄刃銅鉞などがあります。戦国末期になると、河北省燕下都44号墓出土の鉄戟・鉄矛・鉄剣などのように鉄製武器類が急増します。前漢中期以降になると長い大刀など優秀な鉄製武器も誕生し製鉄技術も向上しました。さらに後漢に入ると、卅鍊・五十鍊・百鍊と記載された紀年銘をもつ鉄剣・鉄刀がみられ、百鍊鋼といわれる反復鍛打の鋼が出現しました。

朝鮮半島では、戦国時代の終わりと、燕の領域から、鉄器が朝鮮半島西北部→東北部へとひろまり、ついで朝鮮半島南部まで波及していったようです。紀元前108年漢の武帝による楽浪郡ほか3郡の設置によって、漢代の鉄が直接朝鮮に入るようになりました。

その後、青銅製の武器が鉄製の武器に交替していきました。

『魏志東夷伝弁辰条』には「出国鉄、韓穢倭皆從取之……又以供給二郡」の記事があり、朝鮮半島の鉄製品や素材などがわが国にもたらされたことがわかります。

2. 鉄の伝来と糸島地方

●わが国最古の鉄

わが国ではじめて鉄が登場したのは弥生時代初期の段階といわれています。

二丈町の石崎曲り田遺跡で昭和55年に行われた発掘調査では、弥生時代早期(約2400年前)の集落が発見され、集落を覆っていた遺物包含層の中から一片の鉄が出土したのです。幅4cm、厚さ4mmほどの鉄の板です。本来はもっと大きな鉄製品であったものが、たびたび加工されたり磨かれたりして、小さな鉄片になったと考えられています。これがわが国で発見されている最古の鉄製品です。おそらく朝鮮半島から米つくりの技術とともにもたらされたと考えられます。

熊本県の斉藤山遺跡でも同じように弥生時代初期の鉄斧の転用品が発見されていますので、鉄が弥生時代初期の段階では、すでに北部九州では鉄を知っていた可能性が高いと考えられます。

3. 鉄器の普及

●鉄の急速な普及

弥生文化の到来とともにいち早く渡ってきた鉄も、弥生時代の前半期には、ほとんど列島では広まることはなかったようです。供給元である朝鮮半島においても、鉄が十分に普及していなかったため、まだまだ玄界灘をわたって供給された鉄の量にはごくわずかであったのでしょう。

もたらされた鉄も、貴重であったため、北部九州のごく限られた範囲での流通にとどまっていたのかもしれない。このころの利器は磨製石

器が中心でした。

ところが、弥生時代の半ばを過ぎると石器の出土割合が減少します。おそらく鉄器が急速に浸透し、鉄器の需要が急速に減少したことが要因と考えられます。

しかし、当時の集落を調査してもなかなか鉄器にお目にかかることはありません。おそらく、石器は破損すると廃棄されたのに対し、鉄器はリサイクルされ、小さく朽ちてしまうまで大切に利用されたのではないのでしょうか。

このころの当時の鉄器の普及状況を示す間接的な証拠を斧の柄に見ることができます。弥生時代中期後半から後期初頭の本製品が大量に出土した上鐙子遺跡では、出土した 本の斧柄のうち、大半は鉄斧を装着するものでした。鉄斧が普及がしていたことを裏付けます。

●工具から始まった利器の鉄器化

弥生時代中ごろの鉄は主に斧やヤリガンナなどの木工具として多く用いられたようです。伊都国の王都である三雲・井原遺跡でも、弥生時代後期の遺構から鉄斧、ヤリガンナ、鑿、鑿状の鉄製品などが出土しています。

当時は集落規模の拡大、農地の開発などに伴う、河川や水路の整備など治水管理の強化のために木製の農耕・土木具の需要が飛躍的に拡大し、木材加工の必需品である工具の鉄器化が必要だったのであったのだらうと考えています。

●輸入に依存していた弥生時代の鉄

しかし、鉄は既製品が朝鮮半島からもたらされたものが大半でした。つまり、鉄は交易によってもたらされた輸入品であったのです。

最近の調査で、長崎県壱岐市の原の辻遺跡から、鑄造鉄斧などの鉄製工具、さらにはそれを転用して製作された製品が数多く出土しています。鉄器が壱岐を経由して伊都国に持ち込まれた可能性が高いことがわかってきました。

●儀式的道具から威信財へ

評価が高まった鉄製品は、次第に集落の儀式や

葬儀の際に使われる祭具として用いられるようになりました。

井原塚廻遺跡では、集落の長と考えられる大型の甕棺の縁にめぐらされた周溝から鉄斧と鉄鎌が出土しています。

弥生時代後期になると、鉄製品が副葬品として王墓などの有力層墓に納められるようになります。江戸時代に発見された井原鎚溝遺跡では、「刀剣の類」「鉄の鎧のようなもの」など、鉄製品が副葬されたことが記録されています。

さらに、平原王墓からは木棺の棺上に鉄製の素環頭大刀が副葬されていました。

ちなみに、上町向原遺跡で出土した素環頭大刀も有名です。全長が約120cmあり弥生時代の大刀としては国内最長です。「魏志倭人伝」によると魏の皇帝は銅鏡などとともに卑弥呼に「五尺刀」を2本与えています。当時の一尺は24cmですから、120cmほどになります。まさにその長さは五尺。卑弥呼がもらった刀は、まさにこのような刀であったのかもしれない。

4. 鉄の生産・加工の開始

●糸島地方における鉄生産・加工のはじまり

では、糸島地方で鉄の生産・加工がはじまったのはいつ頃からなのでしょう。鉄生のリサイクルは、弥生時代からすでに行われていたことがわかっていますが、その後、「魏志東夷伝」弁辰の条にみられるように、鉄の原材料を朝鮮半島から輸入し、それを加工して新たな鉄製品を作り出す段階に入って行ったと考えられます。

今宿大塚遺跡では、弥生時代終末の竪穴住居から鉄鏃とともに鉄片が多く出土し、鉄製品の加工に携わっていた可能性が高いことがわかりました。

また、長野川の旧河口から南に1kmほど上流にさかのぼったところにある東下田遺跡では古墳時代中期の竪穴住居から鉄滓が出土しました。一緒に出土した5世紀の須恵器にも鉄滓が付着していました。おそらく鉄を加工作業中に何らかの原因で鉄滓が付着したものと考えられます。

この遺跡では、このほかにも朝鮮半島製の陶質土器や、朝鮮半島南部でみられる水鳥の形をした

酒器も出土していて、朝鮮半島との交易や交渉にかかわっていた集落と考えられ、鉄の加工にも関わっていた可能性があります。

さらに、古墳時代後期になると鉄生産に関する資料が増加します。

福岡市の元岡石ヶ元古墳群からは鉄の生産加工に関連する遺物が数多く副葬されていました。

12号墳では、金鉗や、鉄鎚、金床が出土し、1、2、6、11、28号墳からは鉄滓も出土しました。6号墳では、砂鉄精錬滓も出土し、5、27、33号墳からは砥石も出土しています。

これらの出土品から、古墳の被葬者が、鉄の生産や加工に関わっていた可能性が高いと考えられます。特に6号墳では、新羅系の壺、28号墳では金層ガラスも副葬されており、鉄の生産に朝鮮半島から渡来してきた人々が関わっていたことが推測できます。

●鉄生産の本格化

このような、古墳時代後期の製鉄関連の遺物が多数出土する例は全国的にも珍しく、糸島地方では鉄生産・加工が積極的に進められていた可能性が高いのです。

特に元岡石ヶ元古墳群では、計7点の鍛冶具が出土しており、一帯が鉄生産・加工の拠点であった可能性が高いともいわれています。

また、今宿周辺では、6世紀前半築造の今宿大塚古墳の墳丘盛土中から鉄滓が出土し、近隣の徳永古墳群、相原古墳群、鋤崎古墳群からも精錬、鍛冶滓が副葬されており、これら古墳群の造営集団も鉄生産にかかわっていた可能性が高いと考えられています。

●未発見の古墳時代の生産遺構

しかし、残念ながら、当時の鉄の生産を具体的に示す生産工房などは確認されていません。生産工房の規模が小規模にとどまっていたためか、あるいは遺跡の立地や、遺構の構造が想定と違うものである可能性もあります。しかし、鉄滓が確認されている以上、出土地の周辺では将来必ず生産遺構が発見されるだろうと期待しています。

●初期鉄生産の担い手

元岡古墳群では6号墳をはじめ、朝鮮半島系陶質土器が数多く出土しています。また、19、28号墳では、金層ガラス玉が出土しています。さらに、大陸系の武器や武具なども出土しています。

同じような現象は、隣接する室見川に志願の古墳群にもみられ、鉄滓を多く副葬することで知られるこの地域でも、多くの半島系の遺物が出土しているのです。このことから、古墳時代の当地域の鉄の生産には、渡来系の人々の関与が推測されます。

また、元岡遺跡第7次調査の池状遺構からは「壬辰年韓鐵□□」「里長」などと記された木簡が出土しています。「壬辰」年是一緒に出土した土器から天平勝宝4(752)年と考えられています。「韓鐵」について、次のような奥野正男先生の興味深い指摘があるので、ご紹介します。

「(前略)特に私は□□の断簡から「様相韓鐵師(からかなじ)」「韓鍛冶(からかぬち)」なる古語を連想する。また「韓鐵」といえば、『古事記』応神天皇段に、馬を連れてきた阿智吉師、論語十巻と千字文をもたらした和邇吉士師の渡来をのべたあとに、「また手人韓鍛、名は卓素(たくそ)、呉服・西素(さいそ)二人を奉りき」とある。『古事記』は渡来系製鉄工人のことを「韓鍛」と呼んでいたのである。

また元岡製鉄遺跡から出土した別の木簡には「嶋郡」の文字のあるものもあった。

(中略)

この元岡遺跡のある地域が、律令期の筑前国嶋郡郡に入ることは、大宝二年(701)の「筑前国嶋郡川辺里」戸籍断簡によって知られている。この川辺里戸籍に出てくる人物で、戸主「嶋郡大領」「肥君猪手(ひのきみのいで)」の庶母の氏名は、渡来系氏族の尊称である「吉士」を名字の下につけた「宅蘇吉士須彌豆売(たくそきしすみずめ)」という。また正妻のほかには三人いる妾のなかにも「宅蘇吉士橘売(たくそきしたちばなめ)」がいる。この「嶋郡大領」の母方と、妾の実家が「宅蘇吉士」なのである。「宅蘇吉士」の所在地を知る資料はない。しかし当時の糸島には、嶋郡と怡土郡があり、その怡土郡の中心地が現存する怡土城内の高祖神社のある「高祖(たかす)」の地ではないかと思う。いまの高祖(た

かす)という地名は、古文獻の「高杜(たかこそ)」「宅蘇(たくそ)」「卓素(たくそ)」に通じている。つまり『古事記』に出てくる渡来製鉄工人「韓鍛・卓素」が最初に定住した地に、その氏の名をとった「卓素・宅蘇」の地名が付き、やがて「宅蘇」氏が渡来氏族だったので名字の下に「吉士」が付き、律令の戸籍に引き継がれたのではないか。」

(後略)

(「古代製鉄の研究」筑前の古代製鉄と韓鍛・卓素(宅蘇吉士)のことより抜粋)

奥野先生は、平安時代初期の怡土郡の七郷ひとつである「託社郷」について、その語源が製鉄技術を携えた渡来系の「託蘇氏」であり、渡来集団の初期の拠点である現在の「高祖」につながる「託社郷」であろうと推測されています。

一方、福岡大学の桃崎祐輔先生は、前原市多久の口木2号墳から出土した棘葉形杏葉に着目され、近隣にある「多久社神社」を「託蘇」の転化ととらえ、この地が「託社郷」でないかと推定しています。

平成18年度に多久社神社に近い多久遺跡D地点から、蔵骨器4個をおさめた奈良時代前半の小石室が発見され、さらに、石室の周囲からは鉄滓が出土しました。被葬者たちが鉄生産に関わっていた可能性があるとして注目されました。

周辺に目を移しますと、多久遺跡に近い奈良尾遺跡や上罐子遺跡では奈良時代の鍛冶遺構、多久川河口に近い荻浦坂の下遺跡では製鉄、鍛冶遺構が確認されています。多久川を見下ろす丘陵上では、数こそ少ないものの、後期～終末期にかけての古墳群が立地し、渡来系集団の存在と鉄の生産加工を関連付ける遺跡が集中することがわかりました。糸島地方の初期の鉄生産を検討する上で傾聴すべき見解といえます。

5. 律令期の鉄生産

●大規模な鉄生産コンビナートを形成した糸島地方

古墳の築造も終焉を迎えた七世紀になると、製鉄に関連する遺跡が発見されています。特に糸島半島では元岡遺跡など大規模な鉄生産遺跡が調査され、わが国屈指の鉄生産地帯であったことが

わかってきました。

●糸島半島の主な製鉄遺跡

元岡遺跡の製鉄遺構群 奈良時代を中心とする大規模な製鉄遺跡が発見されています。特に12次調査地点では、27基の製鉄炉が調査され、狭い範囲に遺構が集中的に分布することや、同時に数グループが操業されていることは、他の製鉄遺跡には見られない特徴で、公的な製鉄工房であったと考えられています。

八隈製鉄遺跡 奈良時代の7基の製鉄炉、炭窯、砂鉄貯蔵穴などが発見されました。炉壁も良好な状態で出土し、三角形の送風孔が確認され、当時の炉の構造を知る上で貴重な発見となりました。

大原遺跡群 奈良時代から平安時代にかけての製鉄遺跡です。桑原遺跡同様に糸島半島での製鉄の拠点であったと考えられていますが、元岡遺跡に比べ操業期間が平安時代までの長期にわたっているのが特徴です。

●鍛冶工房が多かった怡土郡域

近年では、旧怡土郡域である前原市、二丈町、福岡市の今宿、周船寺地区でも奈良～平安時代の製鉄に関する遺跡が多く発見されています。

奈良尾遺跡 現在の西九州自動車道路の前原インターチェンジの一角に当たります。調査の結果、奈良～平安時代初期の鍛冶工房が出土しました。鍛冶炉2基、建物2棟などが発見されました。調査の結果、鍛冶の際に飛び散る鍛造剥片とよばれる小鉄片が多数出土したことや、小鍛冶のときにできる鉄滓が出土したことから、鉄の最終的な加工を行う工房と推定されています。

坂の下遺跡 丘陵の谷間で発見された奈良時代の遺跡です。斜面に3棟の竪穴住居、2棟の掘立柱建物、鍛冶炉、廃滓溝などが出土しました。鉄滓を観察した大沢正巳先生によると、鍛冶滓とともに精錬滓もあり、鉄生産にも関わっていた可能性があります。

上罐子遺跡 丘陵の西斜面を造成して営まれた鍛冶工房群が確認されました。掘立柱建物や鍛冶炉の痕跡、鉄滓などが確認されています。

怡土城郭内遺跡群 大門地区の土塁の裾の発掘調査で、大量の鉄滓が発見されました。城内で行った鍛冶により生じた鉄滓を土塁下に投機した可能性があります。

これまでの調査の結果からみると、律令期においては、半島部では元岡遺跡に代表されるように鉄生産が精力的に行われたことがわかります。半島部では、製鉄から鍛冶まで鉄生産の一連の工程が展開されているのに対し、怡土郡域で鍛冶工房が中心に発見されていて、製品の供給に向けての加工を主体とした工程を主体に行うといった役割分担が行われていた可能性も想定されます。

元岡遺跡で生産された鉄の供給地としては、大宰府が想定されることが多いですが、糸島地方では七世紀から八世紀にかけて、雷山神籠石、怡土城、稲積城と相次いで大がかりな築城が行われており、これらの築城事業に必要な鉄製品の供給も、当然考慮に入れておく必要があると考えられます。

●製鉄に欠かせなかった木炭

製鉄に関連する遺跡として最近注目されているのが木炭窯です。木炭は鉄を作るのに不可欠で、一説では鉄の素材1kgを作るためには、その5～6倍の量の木炭が必要だともいわれていて、その確保も重要であったと考えられるのです。

木炭窯ではないかと考えられる遺跡が千町田遺跡、藤原遺跡、八熊製鉄遺跡、向畑古墳(以上志摩町)、上罐子遺跡(前原市)、大原A遺跡、大原D遺跡(福岡市)など、製鉄に関連する遺跡の隣接地で見つかっています。

いずれも時期を示す遺物に乏しく、用途についても断定が難しいところもありますが、近くに鍛冶、製鉄遺構が確認されることが多いことなどから、木炭窯であった可能性が高いと考えられています。

●大規模製鉄の終焉

元岡遺跡で鉄生産のピークは8世紀中～後半です。このころの東アジア情勢は、わが国と新羅との軍事的緊張関係が続き、天平寶字3(759)年～6年にかけて大宰府下の筑前、筑後、肥前、肥後、豊前、豊後、日向の九州七国に甲刀弓箭を製造さ

せ、各国に船や兵を集めて戦闘訓練を行ったり兵器を作らせたりして戦いに備えていました。

奈良尾遺跡について、調査を担当した中間研志氏は人里離れた山奥に大がかりな造成を行ってまで鍛冶工房を営んでいることから、簡易な野鍛冶ではなく、集中して製作に没頭することができる、たとえば刀剣など特殊な製品の加工などに携わったのではないかと考えられました。

糸島の各地で行われていた鉄づくりも奈良時代末には急速にその勢いを失っていきました。神護景雲2(769)年に怡土城の完成後、平安時代の初期には城もその役割を終えて廃城となったと考えられています。現在のところ、平安時代初期まで継続して操業された製鉄遺跡は大原遺跡、石崎曲がり田遺跡など減少しています。

怡土城への鉄の供給が下火となったことも当地の鉄生産の減少と少なからず関係があるものと考えられます。

6. おわりに

●村の鍛冶屋

このように、平安時代以後の糸島地方の鉄生産については、まだよくわかっていません。

飯原門口遺跡では、鎌倉時代の集落のはずれにある掘立柱建物から鍛冶炉が確認されています。おそらく農工具や鉄製品の修理や製作を行っていた「村の鍛冶屋」ではないかと考えられます。

同じような遺構が糸島各地の中世集落で発見されていますが、詳しい様相については今後のさらなる資料の追加を待ちたいと思います。

参考文献

福岡市教育委員会「大塚遺跡現地説明会資料」2008
桃崎祐輔「九州における古墳時代後期の馬具とその変遷」『後期古墳の再検討』第11回九州前方後円墳研究会編 2008
仲間研志『奈良尾遺跡』福岡県教育委員会1992
奥野正男「韓鍛(からかぬち)・卓素の系譜」『日本文化と朝鮮』第3集 新人物往来社・1978
「韓鍛冶・卓素の系譜」金達寿編『日本のなかの朝鮮文化』24号 1974年

	遺跡名	特記記事	弥 生				古墳				飛鳥・白鳳		奈 良			平安時代		出典等
			早期	前期	中期	後期	前期	中期	後期	前半	後半	前半	中頃	後半	9c	10c		
怡土地域	石崎曲り田遺跡	鉄が大陸から渡来	鉄器	甕棺														1
	上罐子遺跡	鉄器の普及																2
	三雲・井原遺跡	鉄器の普及																3
	潤地頭給遺跡	鉄製工具による玉づくり																4
	今宿大塚遺跡	鉄加工工房																5
	井原鎚溝遺跡	首長墓への鉄器副葬																6
	上町向原遺跡																	7
	平原1号墓																	8
	伏龍遺跡																	9
	若八幡宮古墳	首長墓への副葬墳墓の盛行																10
	井原1号墳																	11
	一貴山銚子塚古墳																	12
	鋤崎古墳																	13
	西堂四反田1号墳																	14
	東下田遺跡	鉄加工？																15
	石ヶ元古墳群	鍛冶関連資料の副葬																16
	鋤崎古墳群																	17
	徳永古墳群																	18
	相原古墳群																	19
	相原古墳群焼土壇	木炭窯？																20
	女原上ノ谷製鉄址	鉄滓(砂鉄精練滓)炉壁 製鉄遺構？																21
	雷山神籠石	石切り加工技術																22
	多久口木古墳群	渡来系氏族の古墳群																23
	多久遺跡群D地点	火葬墓と鉄滓																24
	上罐子遺跡	鍛冶工房																25
	奈良尾遺跡	鍛冶工房																26
	塚田遺跡	鍛冶工房																27
	坂の下遺跡	鍛冶工房 火葬墓																28
	怡土城	怡土城の築城・維持管理																29
	石崎曲り田遺跡	鍛冶工房																30
志麻地域	御床松原遺跡	漁具・工具の鉄器化																31
	藤原遺跡	木炭窯																32
	元岡遺跡	大規模製鉄工房群																33
	八熊製鉄遺跡	製鉄工房																34
	吹切遺跡	製鉄工房？																35
	大原D遺跡	製鉄炉・炭窯・鍛冶炉・製錬炉																36
	大原A遺跡	製錬炉(箱形炉)・焼土壇(炭窯？)・鍛冶遺構																37
	千町田遺跡	木炭窯																38

糸島地方の主な鉄関連遺跡一覧

番号	出典等
1	橋口達也『曲り田遺跡3』今宿バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告第9集 1984年 福岡県教育委員会 橋口達也『石崎曲り田遺跡Ⅲ』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集 1985年 福岡県教育委員会
2	野田純子『上罐子遺跡』みえてきた伊都国人のくらし 1996年 前原市教育委員会
3	柳田康雄他『三雲遺跡Ⅰ～Ⅳ』福岡県文化財調査報告書第50、60、63、65集 1980～1983年 福岡県教育委員会
4	江野道和他『潤地頭給遺跡』前原市文化財調査報告書第78集 2005年 前原市教育委員会
5	『今宿大塚遺跡現地説明会資料』 2008年 福岡市教育委員会
6	青柳種信『柳園古器略考』1822年
7	塚本敏夫他『前原市上町向原遺跡出土素環頭大刀の]理化学的分析による年代および産地同定]日本文化財科学会研究発表要旨集 2003年
8	角浩行他『平原遺跡』前原市文化財調査報告書第70集 2002年 前原市教育委員会
9	川村博『伏龍遺跡』 前原町文化財調査報告書第2集 1975年 前原町教育委員会
10	柳田康雄『若八幡宮古墳』今宿バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 1971年 福岡県教育委員会
11	岡部裕俊『井原1号墳』前原市文化財調査報告書第83集 2004年前原市教育委員会
12	小林行雄『一貴山銚子塚古墳の研究』福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書13 1952年 福岡県教育委員会
13	杉山富雄他『鋤崎古墳』福岡市文化財発掘調査報告書第730集 2002年 福岡市教育委員会
14	岡部裕俊『井原地区周辺の古墳群』前原市文化財調査報告書第51集 前原市教育委員会
15	1985年発掘調査 岡部調査所見
16	『元岡・桑原遺跡2』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第744集 2003年 福岡市教育委員会
17	荒巻宏行『鋤崎古墳群2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第506集 1997年 福岡市教育委員会
18	池田祐司『徳永古墳群3 女原上ノ谷製鉄址』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書 第436集 1995年 福岡市教育委員会
19	田中寿夫『相原古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第351集 1993年 福岡市教育委員会
20	田中寿夫『相原古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第351集 1993年 福岡市教育委員会
21	池田祐司『徳永古墳群3 女原上ノ谷製鉄址』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書 第436集 1995年 福岡市教育委員会
22	原田大六『雷山神籠石の列石考』『古代学研究』第28号 1961年 古代学研究会
23	角浩行『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』 前原市文化財調査報告書第38集 1992年 前原町教育委員会
24	檜崎直子『多久遺跡群D地点』前原市文化財調査報告書第98集 2008年 前原市教育委員会
25	1994年発掘調査 岡部調査所見
26	仲間研志『奈良尾遺跡』今宿バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告書第13集 1991年 福岡県教育委員会
27	橋口達也 仲間研志『塚田遺跡』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第7集 1982年 福岡県教育委員会
28	岡部裕俊『荻浦-集落祭祀生産遺構編-J』前原市文化財調査報告書第100集 2008年 前原市教育委員会
29	1986年発掘調査 岡部調査所見
30	古川秀幸『石崎曲り田遺跡』二丈町文化財調査報告書第27集 2001年 二丈町教育委員会
31	井上裕弘『御床松原遺跡』志摩町文化財調査報告書第1集 1980年 志摩町教育委員会
32	橋口達也『向畑古墳・藤原遺跡』志摩町文化財調査報告書第9集 1988年 志摩町教育委員会
33	菅波正人『元岡・桑原遺跡群4』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第860集 2005年 福岡市教育委員会
34	井上裕弘『八熊製鉄遺跡 大牟田遺跡』志摩町文化財調査報告書第2集 1982年 志摩町教育委員会
35	橋口達也『吹切遺跡』志摩町文化財調査報告書第12集 1990年 志摩町教育委員会
36	松村道博他『大原D遺跡群1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第481集 1996年 福岡市教育委員会 菅波正人『大原D遺跡群2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第507集 1997年 福岡市教育委員会 荒巻宏行『大原D遺跡3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第737集 2002年 福岡市教育委員会
37	『大原A遺跡1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第430集 1995年 福岡市教育委員会 『大原A遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第431集 1995年 福岡市教育委員会
38	川村裕一郎『柿添遺跡 千町田遺跡』志摩町文化財調査報告書第20集 1998年 福岡市教育委員会

関連遺跡位置図

